様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４４４

研究課題名（和文）動作主の具現化に関する語彙意味論研究

研究課題名（英文）A lexical semantic study on the realization of agents

研究代表者
于　一楽（YU, YILE）

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０７１０２５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究課題の目標は、動作主にまつわる項の具現に関する現象について、語彙意味論の観点から考察し、言語の普遍性と個別性につながる知見をもたらすことであった。研究期間を通して、興味深い現象とそれにまつわる規則性を見出すことができた。中国語の目的語に動作主の解釈がある構文を中心に考察を行った結果、動詞単独ではなく、動詞に別の要素が付随する場合に当該の現象が可能となるという一般化を提出した。また、日本語や英語の現象の考察も行い、語彙の意味を構造的に示すことが有効な手かがりであると示した。研究成果として、本（５冊、単著と共著含む）、論文（３本）、口頭発表（４件）を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　動作主の具現に関しては、主語に現れるのが一般的な見解である。この研究課題では、これに反する項の具現が見られる構文を複数取り上げて、そこから見出すことのできる一般化を探った。特異な形の項の具現にまつわる一般化を明らかにすることは、言語の普遍性と個別性を明らかにすることに寄与できる。ひいては、言語を操る人間（の思考）について理解を深めることにつながる。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this research is to investigate non-agent prominent constructions from the perspective of lexical semantics and to find out linguistically interesting and meaningful data and its generalization. This research mainly focuses on the Chinese non-agent prominent constructions where agents links to objects. With intensive work on this topic, this research has brought about a generalization that agents can link to objects only when the verb overtly or covertly forms complex predicates. Several Japanese and English constructions related to the non-agent prominent constructions have also been studied, and it is shown in this research that it is also the semantic structures of the verbs and nouns in the constructions under discussion that plays a seminal role in explaining the data.

研究分野：言語学

キーワード：語彙意味論　レキシコン研究　複合動詞　項の具現　クオリア構造　生成レキシコン　動作主

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

Chomsky (1981)以降、動詞の意味が語順を決定づけるという考えが定着し、文法に関わる意味情報が動詞にどのように記載されるのかが議論され、この問題は近年の研究でも注目を集め続けている（Levin and Rappaport 2005, Randall 2010, Wechsler 2015）。Fillmore (1968)で格文法が提唱され、意味役割の概念が定着した 80 年代では、動詞の意味構造に項構造が提唱された。その後、90 年代に項構造では自他交替などの構文交替や give などの動詞が二重目的語構文と与格構文の 2 つの文構造を作ることなどが説明できないという問題点が指摘され、動詞の意味構造はより詳細に記述される必要性が生まれた。Jackendoff (1990)や Levin (1998)等で語彙概念構造（語彙の意味を概念構造に分解する方法論）が提唱され、例えば、kill は[[x DO] CAUSE [y BECOME BE DEAD]]のように意味分解されることになった。語彙概念構造の x は項構造における動作主に当たり、中国語も通常は(1a)のように動作主は主語に具現化され、目的語にはなれない(1b)。ところが、下表に示す通り、動作主が目的語に具現化される中国語の構文もいくつか存在する。

(1)　a. 张三写了一篇论文。（張三＝動作主＝主語）
　　b. *一篇论文写了张三。

構文タイプ	動作主が目的語に具現化される例
結果複合動詞構文	(2) 这双鞋跑累了妈妈。（妈妈＝動作主＝目的語）
双数量構文	(3) 一锅饭吃十个人。（十人＝動作主＝目的語）
存現文	(4) 前面走着一对夫妻。（夫妻＝動作主＝目的語）

２．研究の目的

本研究では、中国語の動詞述語文の様々な特徴の中から、主に、動作主が目的語に具現化される現象にまつわる構文を中心的に扱う。このような現象が観察されるのは、結果複合動詞構文、双数量構文、存現文で、それぞれ動詞述語文を形成しているという点では共通しているが、述語の形成のし方は全く異なる。結果複合動詞構文の述語は「動詞＋動詞」、双数量構文は単独の動詞、存現文は「動詞＋アスペクト助詞」の形で述語が現れる。本研究の目的は、この見かけ上は全く異なる複数の構文が、「複合動詞」をキーワードに統一的に分析できることを明らかにすることである。また、それぞれの構文における解釈のプロセスが語彙概念構造に基づいた分析により、形式化できることを示すことである。

３．研究の方法

本研究は、以下のステップで研究を行う。まず、研究の基盤を整理するために、資料の収集と分類を行う。そして、予備的分析を行う。予備的分析を用いて、仮説を立て、その検証を行う。その際、語彙の意味構造を手がかりとして、動作主が主語に現れない原因を探り、語彙意味論の観点に立った分析を行う。検証の過程で生じる問題点を修正しながら、記述的一般化を行う。そして、理論モデルの構築を行う。

（１）研究基盤の整理：国内外の研究成果の収集
（２）項の具現化に関する語彙意味論分析
（３）問題点の抽出と精査：記述と理論の融合、モデルの提案

４．研究成果

研究成果は次の通りである。

１）結果複合動詞構文、双数量構文、存現文でそれぞれ構文の形式が違うにもかかわらず、動作主が主語に現れないという共通点が見られるのは、複合動詞あるいは複雑述語を形成しているからであるという一般化を提出した。とくに、見かけ上、単独の動詞が現れる双数量構文でも複合動詞を仮定することで、同様の分析ができることを示した。これにまつわる研究成果を以下のとおりに公開した。

于一楽（2018）『中国語の非動作主卓越構文』くろしお出版.

Yu Yile (2019) When and Why Agent Is not Prominent in Chinese and Japanese, Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3 (Nigata University)

Kishimoto Hideki and Yile Yu (2020) Resultative Verb Compounds in Chinese, Kobe Papers in Linguistics 12, 12-53. Department of Linguistics Graduate School of Humanities, Kobe University

２）日本語や英語における関連現象についても考察を行い、語彙の意味構造がやはり非典型的な項の具現を説明する有効な手立てであることを示した。より具体的には、中国語の双数量構文に相当する英語の Accomodation constructions の考察を行い、英語は中国語よりも主語と目的語間の意味の制限が強いことを明らかにした。日本語では、動作主が斜格に降格する軽動詞（ナル）構文があることを明らかにした。また、日本語の誤用など幅広いトピックからの考察も行い、研究成果を以下のとおりに公開した。

Yu Yile（2017）A semantic analysis of English accommodation construction in comparison with Chinese，関西言語学会第 42 回大会（於：京都大学）
于一楽（2017）「誤用の原因が別の誤用に由来する可能性を探って−中国語母語話者の日本語学習者におけるガ格を主題と認識する可能性−」『日語偏誤与日語教学研究』，65-75．浙江工商大学出版社
于一楽（2017）『日語格助詞的偏誤研究：中』11.1 節，12.2 節，12.3 節，13.1 節，14.1 節，于康・林璋（主編），『日語格助詞的偏誤研究：中』，67-69.，102-104.，105-107.，131-133.，161-163．浙江工商大学出版社
Yu Yile（2018）A Semantic Analysis of the English accommodation construction in comparison with Chinese, Proceedings of the Forty-Second Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society, KLS 38, 169-180.
于一楽（2018）『日語格助詞的偏誤研究：下』17.7 節，17.15 節，于康・林璋（主編），『日語格助詞的偏誤研究：下』，109-112.，132-135．浙江工商大学出版社
于一楽（2019）「中国語の非典型的目的語構文における名詞の役割に関する一考察」日本言語学会第 158 回大会（於：一橋大学）
于一楽（2019）「タイ人大学生の日本語作文における誤用の傾向について」2019 年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム（於：中国人民大学）
岸本秀樹・于一楽（2019）「「（漢語/和語）一字形態素-スル」の語形成と形態構造」岸本秀樹・影山太郎（編）『レキシコン研究の新たなアプローチ』，55-80.くろしお出版.
于一楽（2020）「ナル述語における項の選択とクオリア構造」于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂（編）『統語構造と語彙の多角的研究−岸本秀樹教授還暦記念論文集−』319-334.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Yile YU	４．巻 38
２．論文標題 A Semantic Analysis of the English accommodation construction in comparison with Chinese	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Proceedings of the Forty-Second Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society	６．最初と最後の頁 169-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 于一楽	４．巻 2
２．論文標題 誤用の原因が別の誤用に由来する可能性を探って－中国語母語話者の日本語学習者におけるガ格を主題と認識する可能性－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日語偏誤与日語教学研究	６．最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kishimoto Hideki and Yile Yu	４．巻 12
２．論文標題 Resultative Verb Compounds in Chinese	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Kobe Papers in Linguistics	６．最初と最後の頁 12-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Yile YU
２．発表標題 A semantic analysis of English accommodation construction in comparison with Chinese
３．学会等名 関西言語学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yile YU
２．発表標題 When and Why Agent Is not Prominent in Chinese and Japanese
３．学会等名 Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 于一楽
２．発表標題 中国語の非典型的目的語構文における名詞の役割に関する一考察
３．学会等名 日本言語学会第158回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 于一楽
２．発表標題 タイ人大学生の日本語作文における誤用の傾向について
３．学会等名 2019年日本語の　　誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計10件

１．著者名 于康・林璋・張佩霞・高永茂・呂芳・向坂卓也・徐愛紅・高山弘子・彭広陸・于一楽・朴秀娟・黄毅燕・蘇鷹・野村登美子・母育新・陳昌柏・裴麗・肥田栞奈	４．発行年 2018年
２．出版社 浙江工商大学出版社	５．総ページ数 245(109-112)
３．書名 日語格助詞的偏誤研究：下	

1．著者名 于康・林璋・張佩霞・高永茂・呂芳・向坂卓也・徐愛紅・高山弘子・彭広陸・于一楽・朴秀娟・黄毅燕・蘇鷹・野村登美子・母育新・陳昌柏・裴麗・肥田栞奈	4．発行年 2018年
2．出版社 浙江工商大学出版社	5．総ページ数 245(132-135)
3．書名 日語格助詞的偏誤研究：下	

1．著者名 于一楽	4．発行年 2018年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 189
3．書名 中国語の非動作主卓越構文	

1．著者名 于康・林璋・于一楽;・朴秀娟・朴麗華・楊曉敏・呂雷寧・杉村泰・彭广陸・董xin（金を３つ）・林春・張威・王忻・劉鳳榮・彭玉全・徐微潔・金稀玉・陶魏青・王閏梅・鐘勇・陳慧玲・陳玲・王怡・夛田美有紀	4．発行年 2017年
2．出版社 浙江工商大学出版社	5．総ページ数 213（67-69）
3．書名 日語格助詞的偏誤研究：中	

1．著者名 于康・林璋・于一楽;・朴秀娟・朴麗華・楊曉敏・呂雷寧・杉村泰・彭广陸・董xin（金を３つ）・林春・張威・王忻・劉鳳榮・彭玉全・徐微潔・金稀玉・陶魏青・王閏梅・鐘勇・陳慧玲・陳玲・王怡・夛田美有紀	4．発行年 2017年
2．出版社 浙江工商大学出版社	5．総ページ数 213（102-104）
3．書名 日語格助詞的偏誤研究：中	

1．著者名 于康・林璋・于一楽;・朴秀娟・朴麗華・楊曉敏・呂雷寧・杉村泰・彭广陸・董xin（金を３つ）・林春・張威・王忻・劉鳳榮・彭玉全・徐微潔・金稀玉・陶魏青・王閏梅・鐘勇・陳慧玲・陳玲・王怡・夛田美有紀	4．発行年 2017年
2．出版社 浙江工商大学出版社	5．総ページ数 213（105-107）
3．書名 日語格助詞的偏誤研究：中	

1．著者名 于康・林璋・于一楽;・朴秀娟・朴麗華・楊曉敏・呂雷寧・杉村泰・彭广陸・董xin（金を３つ）・林春・張威・王忻・劉鳳榮・彭玉全・徐微潔・金稀玉・陶魏青・王閏梅・鐘勇・陳慧玲・陳玲・王怡・夛田美有紀	4．発行年 2017年
2．出版社 浙江工商大学出版社	5．総ページ数 213（131-133）
3．書名 日語格助詞的偏誤研究：中	

1．著者名 于康・林璋・于一楽;・朴秀娟・朴麗華・楊曉敏・呂雷寧・杉村泰・彭广陸・董xin（金を３つ）・林春・張威・王忻・劉鳳榮・彭玉全・徐微潔・金稀玉・陶魏青・王閏梅・鐘勇・陳慧玲・陳玲・王怡・夛田美有紀	4．発行年 2017年
2．出版社 浙江工商大学出版社	5．総ページ数 213（161-163）
3．書名 日語格助詞的偏誤研究：中	

1．著者名 岸本秀樹・于一楽	4．発行年 2019年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 240(55-80)
3．書名 「「（漢語/和語）一字形態素-スル」の語形成と形態構造」岸本秀樹・影山太郎（編）『レキシコン研究の新たなアプローチ』	

１．著者名 于 一楽、江口 清子、木戸 康人、眞野 美穂	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 384(319-334)
３．書名 「ナル述語における項の選択とクオリア構造」于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂（編）『統語構造と語彙の多角的研究－岸本秀樹教授還暦記念論文集－』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考